特集

八王子ユースシアター つくる、タマリバ。

HACHIOJI YOUTH THEATRE

八王子ユースシアターは、学生を中心としたユース世代が、学校の枠を超えて互いに刺激し合える演劇プロジェクト。八王子ユースシアター2022では、出演団体を公募し、昨年12/16(金)～18(日)の3日間、4作品をいちょうホールで上演しました。そんなユースシアターで、今回のテーマとなったのが『つくる、タマリバ。』――この言葉のもとに集い、関わった人たちの思いや公演終了後の生の声をお届けします!

2023年6/30(金)まで、公演の動画を期間限定で公開中! 詳細はこちらの二次元コードをご覧ください!➡

ホームページ

ディレクター 森 陽平さんに聞く「タマリバ。」に込めた思い



八王子ユースシアター ディレクター
森 陽平さん

東京都出身。岩手県西和賀町在住。日本大学芸術学部演劇学科卒、同大大学院芸術学研究科舞台芸術専攻博士前期課程修了。2012年、岩手県西和賀町にて演劇等の合宿事業「ギンガク(銀河ホール学生演劇合宿事業)」を立ち上げる。2014年、西和賀町に移住。2017年～2019年、西和賀町文化創造館アートディレクター。2020年より八王子ユースシアター外部ディレクターに就任。

今回のテーマ「つくる、タマリバ。」はどのようにして決まったのでしょうか?

八王子は学園都市なので、どうしたら大学生たちが卒業後も街に残ってくれるのかを考えたことがきっかけの一つです。

また、いちょうホールはいかにも公共的な雰囲気があって、そこに学生の存在が関わる余地があるかを考えた時に、今のクールな印象から、もっと熱をもった場所になると良いなと思いました。

ある種いたずら心みたいなもので、学生たちがもつ雑然とした感じ…それを劇場につくることができたら、面白いんじゃないかと思ったんですよね。

実際にこのテーマをもとに上演を終えてどうでしたか?

まず、改めてすごく良いテーマだったと思いますし、参加者、出演者はこのコンセプトを受け止めてくれていたと思います。ただ、参加団体同士の交流や、練習でのホール利用がそこまで活発化しなかった点で課題が残りました。

タマリバって、『ふらっと行く』と、そこに誰かいる』みたいなものですよね。今後もっとやっていきたいのは、その居心地の良さみたいなものをつくっていくこと。現代の社会だからこそ、〝タマる〟場所って、それぞれがもっておいた方が健康的かなと思うんです。そういう空間に自分の時間や力を使える環境って、若い人たちにとって、その後の人生の中でより貴重になっていくんじゃないかと。そんな場所や時間を、いちょうホールや演劇という現場でつくっていけたらと思います。

学生マネージャーの声

この事業の大きな特徴のひとつが「学生マネージャー」制度。八王子近郊に在住または通学する学生が、八王子ユースシアターのマネージャーとして参加しています。今年は5人の学生マネージャーが、公募した出演団体の選考や、各団体の稽古の手伝いなど、制作スタッフの一員となって、上演までの過程をサポートしました!

学生マネージャーに応募したきっかけは?

●中学生の時、演劇部に入っていた時の楽しい思い出があって。高校・大学と離れていたのですが、またやりたいという気持ちがくすぶっていて、大学のポータルサイトで見つけて応募しました。サポート側の経験はなかったので、どのようなことをするのだろうと気になって参加しました。(黒木美幸)

●私は演劇はもともと見る専門で、合唱部に所属しているので市民センターなどに行く機会や裏方スタッフの経験はありました。ホールでイベントをする、公演をつくることがすごく楽しかったので、またそれをしたいと思い応募しました。(渡辺実里)

●「たまり場」という言葉に惹かれて参加しました。私は大学で、地方創生や町おこしについて勉強しているのですが、フィールドワークの場としてより学ぶ場所がなかなか少ない中で、今回公共施設を活用する事業と知って面白そうだなと思い参加しました。(宇和田海月)

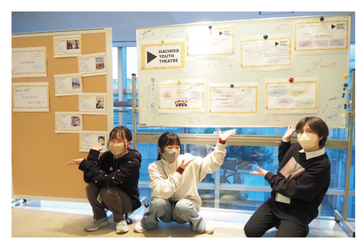
活動を通して学んだことや得られたことは?

●参加する前は、大人たちが決めたことしかやれないイメージだったんです。でも、一番初めの活動が、出演を希望する団体の書類選考だったので、そこから携われることに驚きました。公共のプロジェクトなのでその分責任を感じましたし、進行力や決断力を鍛えられた気がします。(本田未羽)

●学年以外のつながりや大人の人たちとの親交の機会の中で作っていける環境が良かったです。企画をしてく中でのやりとり、それを受けてのブラッシュアップの仕方、また表現に対する新たな視点が得られました。(新里彩乃)



黒木美幸さん(前左)・本田未羽さん(前中央)・宇和田海月さん(前右)・渡辺実里さん(後左)・新里彩乃さん(後右)



みんなで協力して、ロビーにユースシアター紹介コーナーをつくりました!

各出演団体の声



『ロング・クリスマス・ディナー』
作:ソーントン・ワイルダー　演出:都立昭和高校演劇部
19～20世紀のアメリカ。ベヤード家の食堂で、一家のクリスマスディナーが繰り返される。人は生まれ、家に加わり、または離れて、月日は巡る。高校演劇部が、現代演劇の名作に挑戦!

公演を終えて、いかがでしたか?

小沼愛子(演出)　舞台で公演をすること自体が初めてだったので、難しいことが多かったです。時間が足らなかったりハプニングなどもありましたが、本番では練習でやりたかったことが表現できたかな、と思います。あるシーンでは「怒り」というのを表現したくて、演技と照明を直前までこだわり、本番はうまくいって良かったです。

「タマリバ。」というテーマに対して意識したことは?

小沼愛子(演出)　普段の活動では自分の学校の中で完結することが多いので、こんな風に他の団体と活動していることそのものが『タマリバ。』と感じました。他の団体の演技を見る中でも、演出の表現の仕方が全く違い、こんな表現があるんだ!という驚きや、これもやりたい、もっと頑張らなきゃ、と刺激をもらいました。また、舞台の手法についても、例えばプロの照明スタッフと相談をしてご意見をいただけたり、とても勉強になりました。



『灰かぶりのエラ』
作:ガラ林　演出:川端下千聖
高い塔の屋根裏部屋に囚われた灰かぶりのエラ。白馬の王子様も、あの鳥も私の手を引くけれど、私はこの手ではその扉を開けられない。誰か鍵を開けて――シリアスな"ファンタジー"を高校生が熱演!

上演を終えた感想は?思い描いていたことは舞台を通して伝えられましたか?

川端下千聖(演出)　開演までずっと落ち着かなくて、何か仕事がないかと舞台裏でうろうろしていました。内容も複雑だったので全てを伝えられたかと言うと難しいですが、舞台を観ていて今までこの舞台を創り上げるために多くの時間を使い、話し合っていたことが感じられました。

「つくる、タマリバ。」という今回のテーマの中で何か感じたことはありましたか?

矢代汐里(主演)　昨年は他団体と交流する機会がなかったので、このコロナ禍で人が離れていく状況から繋がりを大切にしようというところからもきているテーマかなと思いました。

他団体と練習が一緒になることがあった際、こんな演技をするんだ、こんな舞台の使い方もできるのか、と自分たちだけでやっていると思いつかないことを沢山見つけられました。

舞台美術についても、普段学校での活動ではなかなか交流のない舞台経験者の方からの細かい技術についてのアドバイスが得られたのも良かったです。



『ラブ・フレンド・ランド』
作・演出:平井寛人(尾鳥ひあり/FUKAIPRODUCE 羽衣)
〈世界の終わり〉、その時をどう過ごすか――虚ろな空間から一転し、感情が爆発する迫真の演技…背景に流れる音楽に乗って台詞が紡がれる、独特の手法でその世界観を表現!

公演を終えて、いかがでしたか?

堀 慎太郎(役者)　体の疲れがすごいです(笑)。頭じゃなくて身体からでる、心から出る言葉を大事にしている台本だったなと思います。

台詞を音楽にぴったり乗せていく斬新な演出でしたが、どんな経緯でこの形にたどり着いたのですか?

平井寛人(演出家)　空間とか時間を音楽で定義づけられる心地よさが好きで、自分が使っている演劇の表現手法です。稽古を重ねていく中で、役者さんの魅力を一番引き出せそうな方法は何だろうと考えていた時に見えてきたのが、この手法でした。

演じ手として、難しさはありましたか?

上山史華(役者)　演じるたびにセリフの言い方とか言葉の乗り方が変わるので、音楽とズレてしまうこともありました。でも、とにかく何回も曲を聞き込んで、相手の台詞まで全部覚えていったので、そのズレも良い方向に活かすことができたかな、と思います。

他の団体と交流した時に感じたことは?

安藤 優(役者)　日野台高校演劇部の中間発表に参加させてもらいました。私は今大学生なのですが、自分の高校時代ともまた違って新鮮だったのと、自分自身の成長も振り返ることができました!



『ある?ない?』
作・演出:京サリ
3人の登場人物たちが〈ないもの〉を探す旅へ――コミカルで、最後にはちょっぴり哲学的な問いが残る物語を、パントマイムで熱演!

演出家として、今回挑戦したことや、苦労したことはありましたか?

京サリ(演出家・役者)　普段の活動は一人芝居が中心で、自分で本を書いて自分で演じているので、他の演出家さんにとっては普通のことかもしれませんが、複数人の演出をすること自体が挑戦だったんです。客席が温かくて、皆さんの笑い声にすごく助けられました。

演じてみていかがでしたか?

前田柚希(役者)　今回のこの演目の主体となるパントマイムの表現に一番苦労しました。お二人とも舞台でずっとパントマイムをしていらっしゃる方々で、私だけ初めて挑戦したので、本当にたくさん練習しました!

『タマリバ。』というテーマに対して感じたことは?

降井サットウ(役者)　素晴らしいコンセプトで、コミュニケーションをとる機会もたくさんあったかと思います。欲を言えば、全員で稽古する機会があったら面白いんじゃないかと。例えばお互いの脚本をやってみるとか。役者は演技でコミュニケーションを取るのが一番いいと思うので、今後、そういうチャンスがあるといいなと思います。